

Jリーグのスタジアムビジネスに関する研究

～スマート・ベニュー®を参考として～

生涯スポーツゼミナール 1313033 小脇 健太郎

1. 研究動機・研究目的

Jリーグでは、2012年2月、クラブのリーグ戦への参加資格を審査する「クラブライセンス制度」が、「サッカーの競技水準や施設的水準の持続的な向上、クラブの経営安定化、財務能力・信頼性の向上など」を目的として施行された。制度施行により、Jクラブは、さまざまな要件を満たす必要が生じてきたわけだが、とりわけ難しい課題としてスタジアム設備に関する問題がある。現在各クラブが使用するスタジアムの客席数、トイレ数などの設備・環境がライセンス要件を満たさないケースが多いためである。そこで多くのクラブは、スタジアムの老朽化が顕在化していることも考慮して、新たにスタジアムを建設しようと構想を打ち出した。また、新たにJリーグ参入を目指すJFLや地域リーグのクラブでも、専用スタジアム新設の動きが高まっている。しかし、どのクラブも、莫大な建設費用の調達懸案事項であり、出資元である自治体やスポンサーに、完成後の利用で収益を高めるビジネスプランを示すことが求められている。スタジアムを、多額の維持費用を市町村全体で負担し続ける負の遺産としないために、スタジアムを核とする周辺施設も一体となった、地域全体の経営戦略が必要であると考えられる。

そこで、継続して研究を進めていく前提となる予備研究として本研究に取り組むこととした。継続研究「Jリーグ新スタジアム構想に関する研究」は、乱立する新スタジアム構想が、完成後の利用でスタジアムが創出する収益性について十分な検討がなされているか検証することを目的として行う。具体的には、構想の概要、新設に至った経緯、実現への課題、完成後の収益確保に向けた計画、自治体やスポンサーとの連携体制などを調査・研究によって明らかにしていく。その予備研究となる本研究では、新スタジアム構想を検証する上で基礎となる「スマート・ベニュー®」を、スタジアムの理想的な姿としてとらえることを目的として行う。

2. 研究方法

本研究では、Jリーグのスタジアムビジネスの現状と発展可能性について、「スポーツを核とした街づくりを担う『スマート・ベニュー®』」を主な先行研究として文献研究を実施する。また、「スマート・ベニュー®」の理想形を体現している先進事例として海外事例を、Jリーグのスタジアムの現状として国内事例を、それぞれ数件取り上げて紹介していく。

3. 主な結果と考察

本研究ではまず、スマート・ベニュー®研究の基本概念的整理と、それに即して取り組まれている国内スタジアム・アリーナ事例を紹介した。また、海外サッカースタジアム事例もそれに補足して紹介した。次に、Jリーグの現状として、設立趣旨からクラブライセンス制度までを紹介した上で、データを交えながらスタジアムの現状に迫った。最後にJリーグのスタジアムの現在の取り組みを、スタジアム情報も取り入れながら事例として紹介した。

Jリーグのスタジアムはサッカーをする十分な環境が整っている。各クラブが本拠地とするホームスタジアムを持ち、整備された天然芝のピッチを使用できることは、欧州の有名リーグと比較しても遜色がないサッカー環境といえる。しかし、スタジアムビジネスという観点から考えると、Jリーグのスタジアムが抱える課題は少なくない。とりわけ「スタジアムの立地・アクセス」、「スタジアムの多機能利用」、「周辺施設との連関性」という3点の課題は深刻で、海外の先進事例と比較すると決定的な後れを取っている。

(1) スタジアムの立地・アクセス

日本国内のスタジアムの立地は、鉄道駅から離れた郊外の広大な敷地であることが多い。そのため、観戦者が足を運びづらくなっている。加えて、アクセス面において、ホームゲーム開催時のシャトルバス運行や交通渋滞緩和などの対策もまだまだ改善の余地があるスタジアムが多い。与えられた環境下で観戦者の負担を軽減させる取り組みを行っていくことがクラブに求められる。

(2) スタジアムの多機能利用

サッカースタジアムの絶対条件である天然芝は傷つきやすく、音楽コンサートなど高い収益が見込める興行イベントの誘致が難しい。私見としては、人工芝ピッチ導入の提案をしたい。上質な人工芝の開発が年々進んでいて、天然芝と比べて維持・管理が容易で、耐久性も強く、日照を必要としないことからスタジアムに常設の屋根が設置可能というメリットがある。しかし、現状のクラブライセンス制度のスタジアム要件では、人工芝のピッチは認められておらず、今後のJリーグの対応も含め、動向を追っていきたい内容である。

(3) 周辺施設との連関性

国内のスタジアムの多くが郊外に立地してしまっているがゆえに、商業施設等の近隣への誘致が難しい。一方、海外では、周辺に映画館やレストラン、カジノなどのサービス施設をはじめ、オフィスビルや住宅棟といった生活環境が整えられ、それらとのアクセスも完備されている。周辺施設との連関性が高いと、新規顧客の取り込みや、サッカー自体に関心が低い層の誘客を実現できる。その結果、収益の向上が見込める他、潜在的にサッカーを含むスポーツ振興に寄与することにつながる。スポーツ振興はJリーグの掲げる理念でもあり、実現に向けて周辺施設の充実とそれらとのアクセス整備を推進していくべきである。

4. 結論

事例とともに研究していく中で、「スマート・ベニュー®」がこれからのスタジアム・アリーナが目指すべき理想形であることを学び取った。また、スタジアム・アリーナが収益性を高めていくためにハードの重要性を感じたが、それ以上にクラブの魅力を高めるための努力などソフト面の重要性も感じた。魅力を高めるためにどういった取り組みをすべきかについては、主利用するクラブだけでなく、スポーツビジネスを研究する我々も絶え間なく考えていくべき恒久的な課題かもしれない。

5. 卒業論文の執筆を終えて

継続研究する大前提のもと文献研究を実施したことで、次の段階に向けて大きな弾みとなった。卒業論文で学んだ知識を無駄にすることなく、修士論文に存分に活かしていきたい。今後の研究において、常に「学ぶ姿勢」を大切に過ごすことを意識していきたい。